

北海道の地域医療を担う 救急看護師の職務継続 要因に関する研究



牧野 夏子 (まきの なつこ)

札幌医科大学保健医療学部看護学科助教

2003年札幌医科大学保健医療学部看護学科を卒業。市立札幌病院救命救急センター、大阪府泉州救命救急センター（現・りんくう総合医療センター大阪泉州救命救急センター）の勤務を経て09年から現職。13年札幌市立大学大学院看護学研究科を修了し14年急性・重症患者看護専門看護師を取得。

はじめに

近年、看護師のキャリア支援を目的としたワーク・ライフ・バランスの重要性や支援体制の強化が求められている。一方、広大な地形を有する北海道は、ドクターヘリの設置等の救急医療体制の確立が進められているものの道央圏に医療施設が集中しており、医療の地域格差や豪雪地域の医療との隔たりなどの問題に直面している。このため、北海道の看護師は政令指定都市に看護師が集中し、地方都市での看護師確保が重大な課題となっている。特に、救急看護においては生命の危機的状況にある患者への高度な知識、迅速な判断、熟練した技術が日々要求され、他の領域の看護師よりも身体的・精神的にストレスフルな状況にある¹⁾。そのため、北海道の地域医療を担う救急看護師がキャリアを積み重ねていくことは容易ではないことが推察される。

本研究では北海道の地域医療を担う救急看護師の職務継続の基礎資料として、当該看護師の職務継続に影響する要因について明らかにすることを目的とする。

研究方法

1 研究対象

北海道内で政令指定都市の札幌市以外に所在する救命救急センターに勤務する、実務経験5年以上の看護師を対象条件として設定し、以下のように依頼した。

- 1) 対象施設の看護管理責任者に対し、研究の説明書と研究協力の可否に関する資料を郵送し、返信用葉書にて研究の許可を得た。
- 2) 研究の許可を得た施設の救命救急センターの看護管理者に対し、対象者の推薦を依頼した。
- 3) 2)で推薦された対象者に文書で研究目的と意義、研究方法、倫理的配慮を説明し、研究協力を依頼した。対象者から文書で研究の可否、研究に協力する場合には連絡先等について回答を得た。
- 4) 研究者に研究協力の文書が届いたのち、研究者らから対象者に直接電話または電子メールで、面接の日時と場所を設定した。

2 調査方法

対象者に対しインタビューガイドを用いた半構造化面接^{※1}を行った。面接は対象者と研究者の2名で45分程度行った。面接内容は、1)基本的属性と2)救急看護師として職務を継続してきた要因等で構成した。1)基本的属性は性別、看護師経験年数、救急看護に携わった経験年数（以下、救急看護経験年数と略す）、現在の所属部署、職位、認定資格の有無とした。2)救急看護師として職務を継続してきた要因は、対象者自身が現在就業している地域で救急看護師を続けてきた動機や思い、理由について自由に語るように求めた。なお、対象者の承諾を得て面接の録音を行った。

3 分析方法

本研究では、面接で得られたデータから逐語記録を作成し、繰り返し精読し全体像を把握した。逐語記録より北海道の地域医療を担う救急看護師の職務継続に影響する要因に焦点を当て、分析対象の文脈単位を抽出した。個々の文脈単位の意味内容を検討し、その記述を忠実に反映した表現とし、コードとした。導き出されたコードは、北海道の地域医療を担う救急看護師の職務継続に影響する要因という視点から、内容の類似性と共通性に基づき分類し、サブカテゴリ、カテゴリの形成と命名を行った。なお、分析にあたり、対象施設および対象者の地域や個人が特定されないよう十分に留意し、地域特性などが示される部分はデータとして取り扱わないこととした。

分析過程において研究者らの客観性を担保するために、コードの抽出は共同研究者間で繰り返し検討し、対象者のメンバーチェックを受けた。更に、質的研究に精通した研究者より指導を受けた。

4 倫理的配慮

本研究は、研究者らが所属する2施設の倫理審査委員会により審議を受け、承認を得た上で実施した。対象施設および対象者には、文書で本研究の参加は任意であり匿名性を保証すること、不参加・中止などによる一切の不利益は生じないことを強調して説明した。

※1 半構造化面接

一定の質問に従って面接を進めつつ、状況や回答に応じて質問の内容、表現などを変えられる面接法。方向性を保ちつつ、自由な語りに沿ったより深いデータを得られる。

また、調査で得られたデータは本研究の分析のみに用い、それ以外の用途で使用しないこと、個人情報厳重に管理し研究終了後に消去することを説明し、同意書に対象者の署名を得た。

結果

1 対象者の概要

2013年8～9月、同意の得られた3施設に勤務する看護師4名を対象者とした。研究対象者の概要を表1に示す。

表1 対象者の概要

対象者	性別	経験年数	救急看護 経験年数	所属部署	職位	認定資格の有無
A	女性	19	13	救急外来	スタッフ 看護師	DMAT隊員 ^{注1} フライトナース ^{注2}
B	男性	10	5	救急外来	スタッフ 看護師	フライトナース
C	女性	27	5	HCU ^{注3}	主任看護師	なし
D	女性	18	5	ICU ^{注4}	スタッフ 看護師	DMAT隊員 フライトナース

注1 DMAT（ディーマット）：災害医療支援チーム。大規模な自然災害やテロなどが発生した際、直ちに赴いて応急処置などの医療活動を行う。専門の教育・訓練を受けた医療関係者で編成。

注2 フライトナース：ドクターヘリに乗り込む看護師。救急患者の看護などを行う。

注3 HCU：高度治療室。ICUと一般病棟の間に位置。手術直後の患者などを一時的に収容。

注4 ICU：集中治療室。重症患者を収容し、熟練した医師・看護師が必要な医療設備を駆使して連続看護・処置を行う治療室。

2 救急看護師が職務を継続する要因

対象者の面接から北海道の地域医療を担う救急看護師の職務継続に影響する要因として48コード、29サブカテゴリ、9カテゴリを抽出した。

以後、サブカテゴリを<>、カテゴリを【】にて表記する。

1) 【地域医療を担う看護師として責任を感じる】

このカテゴリは、<自らの果たす役割があり責任感を感じる><地域を担う病院として最後の砦という責任感を感じる>の2つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、北海道という広域な医療圏を守る

病院機能の役割を認識し責任を感じるとともに、看護師自身の役割を認識することにより職務を継続しようと考えていた。

2) 【救急看護の経験を後輩に伝承したい】

このカテゴリは、<救急部門が形になるまで後輩を育成したい><異動した看護師を育成し支えていきたい><救急での経験を後輩に指導していきたい>の3つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、自身が培ってきた経験を後輩である看護師に伝承することを目的とし職務を継続していた。

3) 【救急看護師としての自分に満足できない】

このカテゴリは、<救急看護師として現状に満足できず納得していない><自身のアセスメント^{※2}や看護技術に不足を感じている>の2つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、救急看護という分野での看護師経験について満足しておらず、今後も自己研鑽^{けんさん}する必要性を認識し、それを糧に職務を継続しようと考えていた。

4) 【救急看護師としてキャリアビジョンを持っている】

このカテゴリは、<看護師として資格取得などのキャリアの維持、向上の必要性を感じる><認定看護師^{※3}を取得したい><家庭と仕事を両立しながら学びをいかして仕事を続けたい>の3つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、専門職業人として将来へのビジョンを持ち、それらを描きながらワーク・ライフ・バランスをとりつつ職務を継続していた。

5) 【救急看護との縁を感じる】

このカテゴリは、<救急看護へ導かれていくような感じがあった><看護師を続けているなかできっかけが重なり、救急看護に携わる機会に巡り合ってきた><好む好まざるにかかわらず救急看護と付き合いってきた><良い条件や流れに乗り経験を重ねることで、救急看護への意欲が湧いた>の4つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、救急看護との出会いや縁を実感し、看護師としてのキャリアのなかでの偶発的なタイミングを感じ、救急看護という仕事と付き合い

ていこうと感じていた。

6) 【救急看護という仕事に魅力を感じる】

このカテゴリは、<救急部門以外でやりたいことが思いつかない><救急は限られた短期勝負のなかで出来ることをやり終えたという達成感がある><症例が予測できないなか、自分の経験から患者への対応を模索し実践した結果に、やり終えた感じがある><予測性を持ち実践することに興味がある><突然起きた出来事に対する救急患者、家族への看護に手ごたえを感じる>の5つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、救急看護独特の緊迫感や予測性が求められる看護に達成感や興味を感じ、それらが動機づけとなって職務を継続していた。

7) 【重症患者の救命や回復の軌跡に喜びを感じる】

このカテゴリは、<搬入患者が無事に手術室やICUに入室できたときに、やりがいを感じる><重症患者が多数同時搬入した時に上手に調整できたときに、やりがいを感じる><急変や心肺停止などの患者を想定し準備することに、やりがいを感じる><患者の救命や状態が安定したときに喜びを感じる>の4つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、救急患者の救命や回復のために看護ケアを実施し、それらが良好な方向へと向かうことで喜びを感じ、これが職務継続に影響していた。

8) 【救急患者および家族のケアを通してやりがいを感じる】

このカテゴリは、<患者と自分の相互作用に興味深さを感じる><印象的な患者との出会いや関わり><救急では患者、家族と密に関わることができる><患者との関わりを通じて喜びを感じる>の4つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、救急医療を必要とする患者との関わりを通してやりがいを感じていた。

9) 【職場の人間関係の良さ】

このカテゴリは、<人間関係がよい><スタッフ同士で知識、経験を共有し助け合う>の2つのサブカテゴリから構成された。救急看護師は、職場環境の良さに支えられることで職務を継続することができていた。

※2 アセスメント

客観的および主観的な情報を分析・評価すること。

※3 認定看護師

日本看護師協会が策定した資格認定制度の資格の一つ。特定の看護分野で、熟練した技術と知識を用い、水準の高い看護が実践できる看護師。

考察

看護師の職務継続を検討する場合、生涯にわたり看護職に従事し継続する意思と、現職場での勤務を継続する意思の大きな2つの観点がある。本研究においては、救急看護という現職場での勤務を継続する意思と、対象が勤務する所属地域において生涯にわたり看護職として職務を継続するという意思が、混在している可能性があることを前提とし考察を行う。

【地域医療を担う看護師として責任を感じる】は、救急看護師が北海道という広域な医療圏に住む住民の生命を守る、第三次医療機関^{※4}としての病院機能の役割を認識していることを示唆している。このような病院の役割を感じることで責任感に繋がり、職務の継続に影響していたものと考えられる。これらの背景として、本研究の対象施設は北海道の第三次医療圏のなかで唯一の三次救急医療施設であったことから、医療圏内の住民が救急医療を必要とする状況になった場合には、基幹病院として365日、24時間いつでも搬入を引き受けなくてはならない現状があるものと推察される。また、対象者のうち3名はフライトナースという役割を持っていたことから、実際にプレホスピタル^{※5}の活動として広域な地域に自らが赴き、地域医療の実際に触れていたことも要因の1つとして関係していたのではないかと考えられる。

【救急看護の経験を後輩に伝承したい】より、対象者が今までの培ってきた経験や知識を後輩に伝承することが、自らの役割であると認識していることが明らかとなった。一方で、【救急看護師としての自分に満足できない】と感じ、今後も救急看護師として自らが成長していかなくてはならないと感じていた。また、【救急看護師としてのキャリアビジョンを持っている】ことが、看護師として生涯勤務を続けていく意思に影響していた。本研究の対象者は、看護師経験年数が10年以上、救急看護経験年数が5年以上であり、救急看護という専門分野でのキャリアを重ねていることがわかる。このことから、自らのキャリアを後輩に伝承す

ることや、自らが救急看護師としての専門性の持ったキャリアビジョンを持ち得ることができていたのではないかと考えられる。また、加藤ら²⁾の研究でも専門性を重視することが職務継続に関係していることが報告されており、本研究の対象者が救急看護という専門性を持ち、キャリアビジョンを持っていることは、同様の結果が得られたと考えられる。

一方で、救急看護師としての自分に満足できないと感じている点は、先行研究でも報告されていない部分であり興味深い結果であった。救急看護師は、緊急時の状況把握と判断力やチーム医療の調整など、広範囲な役割が求められることが知られている。また、患者やその家族は年齢、疾患、受傷機転^{※6}などが様々であり多くの知識、臨床判断に基づいた看護が求められる。そのため、経験を重ねてもなお自己実現に至らないと感じるのではないかと推察される。

【救急看護との縁を感じる】、【救急看護に魅力を感じる】は、救急看護との巡り合わせを感じるとともに、救急看護という仕事を誇りとして感じていることが明らかとなった。加藤ら²⁾の研究では、看護師は人に誇れる仕事と認識している人ほど仕事の満足度は高く、仕事満足度が高いほど職務継続意思は高いことを報告しており、職務継続に影響する要因として、救急看護師としての仕事内容に誇りを持つことが重要であることが示唆された。

【重症患者の救命や回復の軌跡に喜びを感じる】、【救急患者および家族のケアを通してやりがいを感じる】に示されるように、救急看護師は救急患者の救命や回復に喜びを感じ、看護ケアを通してやりがいを感じていた。看護師を対象とした研究³⁾においても、患者の回復は看護実践を承認することが示されており、本研究でも同様の結果が得られたものとする。特に、救急看護の特徴として患者の救命や回復の軌跡を確認することが特徴である。また、看護管理の分野でも看護にやりがいを感じているものほど動機づけが強く、職務を継続する要因となること、職務継続意思が高い

※4 第三次医療機関

生命の危機に瀕している重篤な救急患者を24時間受け入れることができ、高度な診療機能を持つ医療機関。

※5 プレホスピタル

病院前救護。急病人などを病院に運び込む前に行う応急手当て。

※6 受傷機転

打撲や骨折などの外傷を負うに至った原因や経緯のこと。

看護師ほどやりがいを持っていることが報告されている⁴⁾。

【職場の人間関係の良さ】は、すでに多数の先行研究でも報告されており、職場の人的環境や労働条件、支えとなる人の存在などが離職を予防することが明らかとなっている^{3) 4) 5)}。本研究でも同様の結果が得られており、職務継続のためには看護師の働きやすい職場環境が重要であることが再確認された。

以上から、北海道の地域医療を担う救急看護師の職務継続の要因は、自施設の病院機能や特徴を理解し地域を守る責任感を持つことや、救急看護師としてのキャリアビジョンを持ち自己実現に向けた課題を明確にすること、救急看護という仕事に誇りを持ち看護ケアを実践すること、職場環境の良さであることが明らかとなった。本研究結果は、地域医療を担う看護師が職務継続の基礎資料となり得、支援内容を検討していく一助となり得るものと考えられる。

研究の限界と今後の課題

本研究は、北海道の政令指定都市である札幌市を除いた地域の救命救急センターに勤務する経験年数5年以上の看護師を対象を限定している。よって、北海道の地域医療を担う救急看護師の職務継続に影響する要因を明らかにするためには、より広範囲の多数の対象施設と対象者を含めた検討が必要である。

今後は、対象施設および対象者数の増加とともに、地域医療を担う救急看護師の職務継続に影響する要因について検討を重ね、研究を継続していくことが課題である。

謝辞

本研究は一般財団法人北海道開発協会開発調査総合研究所の研究助成を受けて実施した一部である。助成いただいた一般財団法人北海道開発協会開発調査総合研究所と本研究にご協力いただきました病院の看護管理責任者の皆様、対象者の皆様に心より感謝申し上げます。

付記

本研究の共同研究者は、吉田祐子（北海道大学保健科学研究所助教）、小川謙（札幌市病院局市立札幌病院救命救急センター急性・重症患者看護専門看護師）、門間正子（日本医療大学保健医療学部看護学科教授）であり、研究の全過程において指導ならびに協力を得た。

なお、本研究の一部は第39回北海道救急医学会学術集会、第16回日本救急看護学会学術集会で発表した。

参考文献

- 1) 山勢博彰:救急医療における看護師のストレスの実態. *Emergency nursing*15 (11) 16-22, 2002
- 2) 加藤栄子,尾崎フサ子:中高年看護職者の職務継続意思と職務満足に関連する要因の検討. *日本看護科学会誌*31(3): 12-20,2011
- 3) 望月彩,秋山ゆかり:ベテラン看護師の職務継続につながる原動力. *日本看護学会論文集 看護管理*43:99-102,2013
- 4) 松島可苗,菅原峰子,照井レナ他:北海道における女性看護師職員を対象とした生涯の勤務継続意思に関する研究. *北海道医療大学看護福祉学部紀要*11:37-41,2004
- 5) 真木佐知子,笹川真紀子,廣常秀人他:三次救急医療に従事する看護師の外傷性ストレス及び精神健康の実態と関連要因8(2):43-52,2007

* 牧野(中井)夏子:北海道の僻地医療を支える救急看護師の職務継続の要因に関する研究2014『北海道開発協会平成25年度助成研究概要・詳細』(一財)北海道開発協会ホームページ